書簡　十（新編井月全集 517）

厳敷余寒先以御多福珍喜不斜奉　存　候。{ここまであいさつ文。}

扨年内は殊の方諸方一統不融通、其御連中えも罷出候　心得に候　処、貴所様へ拝顔の節、参堂の由申上候　処、【さて、昨年中はあれこれ思うようにならず、俳諧仲間たちのところへも行くつもりでいたところ、あなたのお顔を拝見したときに、お宅へうかがうつもりだと申し上げましたが、】

上穂市素見にて　漸　昼　食蔵六方へ寄馳走に相成、黄昏頃もよりの衆と一所に罷　帰　申　候故、尊家等え参上の心組も出来兼、【上穂宿（＝駒ヶ根市赤穂）の市（いち）を見て回り、ようやく昼食を蔵六（＝松崎量平、赤穂の学校教師）の家へ寄って御馳走になり、夕方ごろ近所の人たちと一緒に帰ってきたので、あなたの家などへ参上する心構えもできず、】{赤穂から、どこへ帰ってきたのだろうか。東春近の山好のところか。}

夫には門屋に行違ひ等（カ）不都合、東西奔走月迫（カ）山好待（カ）入、夫故別而混雑、【門屋（＝飯島山好の家）で行き違いなど不都合があり、東西奔走して月末が迫り、山好を待っていたため、特にゴタゴタしており、】

年は同所にて一昨日迄何方へも不参、注文の衣類今に不染大手違、今日とても冬の儘草庵に蝸居、御察可被成下候。何れ不遠参堂万々御礼可申上候。【年越しは同所（＝山好の家）で行い、一昨日までどこへも行かず、注文していた衣類は、大きな手違いがあって未だに染め上がらず、今日も冬の服装のまま草庵に引きこもっていますことをお察しください。近いうちにうかがって、いろいろお礼を申し上げます。】{この「草庵」は、山好の家で間借りでもしていたのだろうか。山好の家は「馬の庵」と称していたようだし、新編井月全集 P. 468 には「翠柏園」という名も出ている。当時の風流人たちは、自宅にこういった風雅な名前を付けて、楽しんでいた

のだろう。}

一、例の拝借金の処は、段々御迷惑筋の処は御察申居候へ共、何とも小生以参外御両公様え拝顔ならでは分り兼候義に御坐候。【例の拝借金のことでご迷惑をかけましたが、自分はその場にいなかったので分かりません。】{「両公様」は、書簡 九に出てくる五声・梅竹のことだろう。}

一、旧冬銘酒五升御無心申上候処、御承知被下候ニ付、御寵親父公へも咄し置候処、今に相届不申、今日態々使差上申候間、何卒絶品の処御配慮被成下候様、重畳奉願上候。【昨年の末に酒を五升お願いしましたが、承知していただいたので、お父上さまにも話しておいたのですが、いまだに届かず、今日わざわざ使いの者をやりましたので、なにとぞ絶品の酒を下さりますよう、重ねてお願いします。】{おそらく書簡 八に載っている、酒の寄進の件だろう。}

何事も尊顔万々可奉申上候恐々頓首

正月七日　井月拝

人の日や鳥かげさへもまつたより

【何事もご尊顔を拝したときにいろいろ申し上げることにします。】{俳句は、「人日（じんじつ）の今日（一月七日）、人間だけでなく鳥たちも、あなたからのお返事を待っていますよ」といったところだろう。}

尚々、若君え破魔弓さし上度存居候処本文の次第、摺物の口画に注文いたし、御免の蒙り（カ）候。宜敷御吹聴可被成下候。【息子さんへ破魔弓（＝男の子のいる家で、正月に飾る縁起物）をさしあげたいところですが、本文に書いたとおりバタバタしています。すり物の口絵に破魔弓を載せるよう注文しましたので、それで許してください。この件、よろしく吹聴してください。】{「摺物」は、おそらく歳旦帳だろう。正月に門人たちを集めて披露する俳句集のこと。}

無いそでをなをふる雪の歳暮かな

と申候。御評可被成候。

柳の家拝

蝸石雅君　豹皮下

{俳句をひとつ批評してほしいと言っている。昨年末に作った句なのだろう。歳の暮れでお金に苦労している、無いそでをなお振らなければならない、といった内容。「そでを振る」と「降る雪」が掛詞（かけことば）になっている。}

書中山好とあるは東春近村上殿島の飯島代治、馬の庵と称す。門屋はその家の通称。（東春近村織井今朝十氏所贈高津蔵、その後駒ヶ根博物館蔵）

{書簡 一 では悪しざまに書かれている山好だが、この手紙にはまだそんな様子もなく、正月には山好の家で過ごしている。たぶん関係が悪化する以前に書かれた手紙なのだろう。そもそも山好は、五声とともに芭蕉堂建設計画を企てた中心人物である（新編井月全集P.468「春近開庵勧請文」）。それなのに、なぜ井月との関係が悪化したのだろうか。五声と山好は、土地を用意し、門人たちから寄付金を集めた。しかし明治五年、井月の戸籍の問題で、芭蕉堂建設計画は暗礁に乗り上げた。戸籍がないものを村に住まわせたとなれば、新政府に逆らうことになる。そこで井月は、戸籍を取りに行くための旅費を捻出しようと送別会を開いたが、かえって十両もの借金ができてしまった。しかもその借金の穴埋めを、寄付金の中から補填してはどうかと言いだした（書簡 九）。ほかにも井月は、寄付金の中から、あれこれと使い込んでいたようである（書簡 一）。寄付金を目的外に流用していることについて、きっと山好は腹を立てたのだろう。他の門人たちも騒ぎ始めたのだろう。「おれたちから寄付金を集めておいて、芭蕉堂は建たないじゃないか。これでは詐欺だ。井月先生は一体どういうつもりなんだ」と。のちに山好は、井月を善光寺へ連れ出して置き去りにした（新編井月全集P.576「まかれた井月」）。決して意地悪でそうしたのではなく、「このまま井月先生を伊那谷に置いておいたら、詐欺師になってしまう。寄付金集めに

加担したおれも共犯になってしまう。それだけは避けたい」という一念からだったのかもしれない。なお、置き去りにしたのではなく、井月のほうが善光寺で姿をくらました、という伝聞もある。}